島根日日新聞

発行所　島根日日新聞社　〒693－0001出雲市今市町743－22

山陰あれこれ　94　令和2年6月19日掲載予定

本を読む楽しみ

酒井　董（ただ）美（よし）

最近よく言われているのは「以前は列車やバスに乗ったら本を読んでいる人があちこちにいたけれど今ごろはイヤホーンで音楽を聴いている人が多くなったね」ということだったが、これもどうやら過去のものになりそうで。今ではたいていスマホをあれこれしながら、いろいろな画面を開いている姿のいかに多いことか。これも時代の流れだと言ってしまえばそれまでではあるが…。

そのような風潮に抗（あらが）うかのように筆者は常に本をカバンの中に入れておいて、列車に乗ったおりにはしっかり読書をするようにしている。貴重な時間をスマホでゲームにうつつを抜かす気分には到底なれないのは、筆者がやはり昔風の人間だからだろうか。

別にコマーシャルを頼まれたわけではないが、手軽に時間を潰すのに最適だと考えているのはA5判34ページの月刊誌『楽しいわが家』である。発行は全国信用金庫協会で、創刊されたのは昭和28年(1953)5月であるから、67年前ということになる。毎号気の利いたエッセイあり、時局に関する解説からホームサイエンスや生活メモ、ふるさと通信、わが家の本棚(本の紹介)、詩(雲子の詩帖から)、料理のことやマンガもあるので、小型の総合雑誌といったところであり、読み応え充分である。そして長期連載を続けている読み物に「日本の民話」がある。毎回、井出文蔵氏の切り絵もすてきで内容を楽しませてくれている。連載は7月号の「鏡知らず」で617回になるが、読者の支持を得てなかなか好評である。今年の3月号には筆者の寄稿した「腰折れ雀」が出ているが、これは鳥取県八頭郡智頭町の明治40年(1907)生まれの女性からうかがった話である。

この雑誌は各地の信用金庫の店頭などに置かれているから、そこを利用なさっている方々には、頼めば無料でもらうことができるようだ。

ところで、近頃筆者が興味を持って読んでいる単行本は、内藤正中著『島根県の教育史』(思文閣出版発行・A5判300ページ)である。著者・内藤正中氏(1929~2012)は島根大学名誉教授で歴史学者。専攻は日本経済史であるが、参考文献として市町村史誌はもとより、学校史、伝記など何と516の文献を精査しての著述であり、江戸時代の当県を松江藩、浜田藩、津和野藩に分けながら、各藩の教育の在り方を特に江戸時代から幕末を中心に、該当藩の歴史に沿って紹介している。さらに幕末の隠岐騒動の思想的背景や、それに対する松江藩との対応にも詳しい。そして各藩の教育の任に当たっていた人物の経歴から、藩校の誕生と教育の実際について、具体的に必要部分を引用しながら述べている。内容は、詳細さにおいて本書の右に出るものはないと思われる。さすがは内藤正中氏ならではの大変な力作だと、筆者は改めて氏のご辛苦に心から頭を下げつつ再読したのである。本書の発刊されたのは昭和60年(1985)と、かなり以前になってしまっているが、本県の教育を語るのには、この本こそ必携書であると改めて痛感した。

こうして読書の醍醐味を味わいながら、筆者は少しずつ本読みを楽しんでいる毎日である。イヤホンでの音楽試聴とかスマホいじりもよかろうが、今一度、昔のように読書を楽しむのもよいのではないかと思っているのである。**（元島根大学法文学部教授）**